

問題は **一** から **三** までで、一ページから十六ページまであります。確かめなさい。

解答は解答番号 **1** から **24** までにマークしなさい。

**一** 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

『現代思想』（一九九三年八月号）の岩谷宏氏の「歩行と思索」の冒頭の文章に出会って、おや同じことを書いている人がいる、とびっくりさせられた。それは次のように読める。

ローカル者Aとそのラング $\alpha$ 、Bとそのラング $\beta$ があるとき、AB間のコミュニケーションを支えるラング $\omega$ は、 $\alpha$ と $\beta$ の和集合でも積集合でもなく、またどちらかが他方を押し去ったものでもないだろう。ラング $\omega$ は、コミュニケーションへの意思を持ったAB両者によって、新たに作りだされていくものだ。ラング $\omega$ は、 $\alpha$ と $\beta$ から完全に断絶した、まったく新規の言語系ではない。またそれは歴史上のほとんどの時間において、最終完成態ではなくて進化的動態であるため、AB兩人から見たとき、一方に $\alpha$ の $\omega$ バージョンが、そして他方に $\beta$ の $\omega$ バージョンがある、という見かけになるだろう。……

まさに、ここで岩谷氏の言われていることこそ、私が扱おうと考えている問題である。まことに明晰にこう言われてしまうと、逆に継ぎ穂がなくな

る感じがだが、私なりに戦線を建て直して、考えてみることにする。問題の設定は、まさに岩谷氏の言われる通りである。付け加えるべきことは、何一つない。あるとすれば、私は、問題をラングや言語という切り口ではなく、文化全体、あるいは学問体系全体といった、少しずらしたところを考えてい、という一点のみだろう。

そうは言っても、私は、そうした問題を考えるときに、それを言語へ移してみる、という方法をとってきた。したがって、結局、話は、岩谷氏が問題にされた言語から始まるのである。幾つかの機会にすでに取り上げた話だが、ここでも使わせて戴こう。<sup>注2</sup> 太宰の小説を英語に翻訳したときのことである。登場人物は中年の男性、和服に「白足袋」を履いているという描写である。これを著名な日本文学の専門家のアメリカ人が、『white gloves』を着けている、と訳された、という話である。断るまでもないと思うが、これは、翻訳とはこのように行いべきもの、という好い方の実例として、翻訳教室などで語り継がれているという。

この実例は、問題の核心を衝いている。太宰の操る日本語を使う共同体のなかで、中年の男性が白足袋を履いている、と言え、即座にそれだけの意味と価値とが生まれる。恐らくそこでは、「やや過度に亘る潔癖感、強い自意識、スクエアな美学」<sup>注3</sup>などが、暗黙の裡に諒解されるだろう。共同体の一員であるということは、それが判る、ということである。ところが翻訳者の生きる共同体であるアメリカやイギリスでは、それと同じ役割を果たす語彙は、決して日本語の「白足袋」を機械的に英語に置き換えた『white socks』ではあるまい。翻訳者は、そこで、英語を話す共同体のなかでそれと同じ役割を果たして、しかも極端に「白足袋」から離れるこ

とのない単語を、英語のなかに捜し当てた結果が、「白い手袋」ということになったのであろう。もちろん、そのような配慮と手続きとは、翻訳者として完璧と言うほかはない。これが「白いソックス」であつたら滑稽というほかはない。「白いソックス」は、英語圏では、むしろ「若い、青臭い、学生風、カジュアル」など、およそ「白足袋」とはかけ離れた意味合いを示すものだからである。

したがって、この実例は、「良質の翻訳」の例となるのである。しかし、問題はもう一つ先にあると言わなければならない。それは何か。この英語の翻訳を読んだ、英語を話す共同体のメンバーは、自分たちの解釈系によって、日本語の文化のなかで起こっている、そして太宰が描いている現象を理解することになる。しかしながら、では、日本の文化、そのなかでの日本的現象としての「白足袋」の意味や価値は、この「翻訳」で伝わるであろうか。

<sup>注4</sup> ポルトマン流に言えば、「早産して」世に生まれ出た人間は、産んだ母親が帰属する共同体という「社会的子宮」のなかで、なおかなり長い時間をかけて保護されながら育てられなければならない。したがって、人間は、もちろん何かの事情で、その後別の共同体に帰属することになる場合もないわけではないにしても、成人して後は、自分を育ててくれた「子宮」の一員になることを宿命付けられていると言ってよい。その間、人間の脳は、社会的子宮としての共同体のもろもろのセッティングのなかで、言語を習得し、習得された言語が成立する意味の空間の「歪み」のなかで、それに添って行動するための能力を発揮するようになる。

この手続きを踏まないまま、「人間」となった例はない。伝えられる

「狼<sup>おおかみ</sup>に育てられた少女」の事例は、ある程度の年齢に達するまでに、そのような能力の形成が行われなかったときには、「人間」となり得ないことを示していると考えられる。したがって、すべての人間の認識活動は、社会的な子宮の役割を果たした意味空間との関連のなかで、成立するものとなるだろう。

比較的素朴な言い方で満足するとすれば、人間の認識は、あるいはしたがって人間の知識は、そのような場と空間のなかの個人が、外界との相互作用のなかで組み上げる構成物である、と言ってよいことになる。岩谷氏の言葉遣いを借りれば、人間は常にローカルであって、そのローカリティを「普遍」と思い誤ってはいけなことになる。

そして、如何なる人間もこの宿命を免れ得ないのであれば、まさしく、英語の子宮で育った人間には「白い手袋」の理解しか有り得ず、日本語の子宮で育った人間には「白足袋」しか有り得ぬ。そして前述の翻訳者のとった方法は、<sup>エ</sup>間然するところのないもの、と言うだけで終わってしまう。

けれども、それでは実は「翻訳」ではないではないか、という批判が有り得よう。かつて<sup>注5</sup>黒岩涙香らは、西欧の文学作品の登場人物をすべて日本の名前に変え、社会的・時代的背景などもすっかり日本に移し変えた、いわゆる翻案物を書いた。それでも、どこかに違和感があつて、奇妙にバタ臭くそれが日本的な名前や文脈のなかでしゃべったり行動したりするので、かえって落ち着かない状況を作り出していたが、それは今は措こう。「白い手袋」をつけているとされたその人物は、英語の共同体のなかでは何の不都合もなく受け容れられ、理解されるだろうが、それによって、日本語の共同体の持つ習慣や価値観や意味の空間の歪みが、英語の共同体に「伝

えられた」ことにはならない。自分たちの特別、特定の意味の空間の歪みとは異なった別の歪みがあることには気付かないし、したがって、自分たちが特別・特定の意味の空間のなかで認識を得、行動していることにも気付かないことになってしまう。

言い換えると、完全な形と程度で行われた翻訳は「翻訳」ではなく<sup>オ</sup>なってしまう、という奇妙なアポリアが<sup>注6</sup>ここにあるように思われる。そして、翻訳者はできるだけ「完璧」な翻訳を心掛ける。それは他の文化の意味の空間を、部分的にであれ、自分たちの空間のなかに持ち込もうとする作業ではなかったのか。翻訳が、もしそれを目指す営みであるとすれば、その目標は、翻訳が完全になればなるほど、逆に達成される望みが遠くなるのである。もし「翻訳」された結果が、ある文化圏・言語系に全く違和感なく受け容れられるとすれば、それはもはや異文化でも異言語でもないことになるからである。それでは、そもそも「翻訳」は一般に可能なのであろうか。

ここまでは、翻訳に事寄せて語ったけれども、言うまでもなく、問題の視野はもっと遙かに広い。文化人類学の近年の学問的方法、あるいはそれを歴史に応用した結果としての「歴史の文化人類学化」における学問的方法は、どちらも異文化、異時間に迫るための、必須・不可欠の方法であるように思われ、そのことを意識した人々は、多かれ少なかれ、その方向で、自らの学問を進めているけれども、そこにも、上に述べた翻訳の困難と全く同型・同種の困難が付きまとうはずである。

例えば文化人類学的文脈で起こる事態を、岩谷流に書けば、こういうことになる。文化 $\alpha$ のなかのローカルの個人Aは、 $\alpha$ を「対照枠」(frame of reference)として現象を認知し、理解する。Aは $\alpha$ とは異なる文化 $\beta$ に学

問的アプローチをしようとする。 $\beta$ のなかで起こった現象を、Aは如何なる「対照枠」に基づいて認知し理解するであろうか。もしAが、完全に $\beta$ を習得した結果、 $\beta$ を対照枠としてその現象を認知し理解したとすると(そのような状態になることが、Aが $\beta$ にアプローチするときの最終的目標である)、そのときAはもはやローカルの個人Aではなく、 $\beta$ 内のローカルの個人Bであると言わなければならない。そのとき彼は $\alpha$ のローカル者ではないのであるから、 $\alpha$ のローカル者が異文化 $\beta$ を理解した、ということにはならなくなってしまう。

ここで生まれる困難は、したがって、 $\alpha$ のローカル者が、異文化 $\beta$ を理解できるのであろうか、という問いに對して、肯定的に答えられない、というところに表れるものであると言ってよい。もちろんかつての近代西欧のように、すべての文化のなかで起こるすべての現象は、結局自分たちの文化 $\alpha$ を対照枠として認知され理解されるのが正しい、と言っていれば、この困難は起こらないことは自明である。しかし、一旦この、言わば「傲慢」な姿勢を崩したその瞬間に、このような困難が待ち受けていたというのは、皮肉と言えば皮肉である。

(村上陽一郎『文明のなかの科学』による)

注1 ラング——言語学者ソシユールの用語。同一言語を用いる共同体の人々によって共有されている、様々な社会的規約としての言語体系。

注2 太宰——太宰治（一九〇九～一九四八年）、日本の小説家。

注3 スクエアな——かたくるしい。堅物な。

注4 ポルトマン——アドルフ・ポルトマン（一八九七～一九八二年）、スイスの生物学者。哺乳類と人間の子供の発達を比較研究し、人間は生理的に早産であると結論づけた。

注5 黒岩涙香——一八六二～一九二〇年、明治の出版人・文学者。

注6 アポリア——解決できない難問。

1 傍線部ア「それが判る」とは、この場合どういうことか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

① 中年の男性がなぜ「白足袋」を履いているかについての理由がわかるということ。

② 「白足袋」を中年の男性が履いている、ということの意味と価値がわかるということ。

③ 太宰がなぜ「白足袋」と描写したかについての意図がわかるということ。

④ 日本文学の専門家のアメリカ人が、「白足袋」を直訳しなかった理由がわかるということ。

⑤ 《white gloves》が「白足袋」の翻訳の好例として評価される理由が

わかるということ。

2 傍線部イ「そのような配慮と手続き」とは、具体的にはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

① 日本語の「白足袋」という単語から極端に離れないように、英語で機械的に「白いソックス」と翻訳すること。

② 日本語の「白足袋」を翻訳する作業を通して、英語共同体のメンバーの解釈の独自性を考察すること。

③ 日本語の「白足袋」と英語の「白いソックス」が持つそれぞれの役割の違いを知らせよう翻訳すること。

④ 日本語の「白足袋」が果たす役割を理解し、英語の中でも同様の働きをする語を捜し当てて「白い手袋」と翻訳すること。

⑤ 日本語の「白足袋」を「白い手袋」と翻訳する際、日本文化において「白足袋」が果たす役割も合わせて伝えるということ。

3 傍線部ウ「この手続きを踏まないまま、『人間』となった例はない」とあるが、ここで「人間」になるとはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 共同体の中でその言語を習得し、習得された言語が成立する意味空間の中で認識を形成し行動するようになるということ。
- ② 産んだ母親が帰属する共同体の中で長い時間をかけて育てられ、その後別の共同体に帰属するようになるということ。
- ③ 共同体のもろもろのセッティングの中で言語を習得し、行動することによって共同体の一員としての自覚を持つようになるということ。
- ④ 習得された言語が成立する意味の空間は歪んでいるので、それに疑問を持ち行動するようになるということ。
- ⑤ 共同体の持つ意味空間で認識を形成し行動することにより、他の共同体に無関心になっていくということ。

4 傍線部エ「間然するところのないもの」を別の表現に置き換えるとする、どの表現が最も適切か。次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 味も素っ気もないもの
- ② 及びも付かないもの
- ③ 非の打ちどころのないもの
- ④ 可もなく不可もないもの
- ⑤ 一筋縄ではいかないもの

5 傍線部オ「完全な形と程度で行われた翻訳」とは、ここではどのようなものを指すか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 他の文化の意味空間を、部分的にでも翻訳を読む側の意味空間の中に持ち込もうとすること。
- ② 翻訳を読む側の特定の意味空間の中で、違和感なく受け容れられ理解されるような語に置き換えること。
- ③ 翻訳を読む側の意味空間の歪みを自覚させるような、違和感のある表現を選ぶこと。
- ④ 翻訳を読む側が特定の意味空間の歪みの中で認識を得ているのだと伝えること。
- ⑤ 異文化・異言語としての違和感を読者に意識させるような表現を意図的に選ぶこと。

## 6

傍線部カ「翻訳が完全になればなるほど、逆に達成される望みが遠くなる」のはなぜか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 自分たちの意味空間に異なる文化の意味空間をそのまま持ち込もうとすることで大きな違和感を感じるようになり、その結果、異文化・異言語を特別視して理解しようとする意欲や態度が減退してしまうから。
- ② 自分たちの意味空間の中で違和感なく受け容れられる語に翻訳されるため、自分たちとは異なる意味空間の存在に気付くことができず、その結果、異文化・異言語に対する間違った偏見を生むことになるから。
- ③ 自分たちの意味空間の中で何の不都合もなく受け容れられる語に翻訳されるため、自分たちとは異なる意味空間があることに気付くことができず、異文化・異言語への理解を面倒に感じるようになるから。
- ④ 自分たちの意味空間に異なる文化の意味空間を持ち込もうとすることで、自分たちとは異なる意味空間の存在に気付くものの、それが歪んでいると感じてしまい、自分たちの認識が正しいと考えてしまうから。
- ⑤ 自分たちの意味空間の中で何の不都合もなく受け容れられる語に翻訳されるため、自分たちとは異なる意味空間の存在に気付かず、自分たちが特定の意味空間の中で認識・行動していることにも気付かないことになるから。

## 7

傍線部キ「肯定的に答えられない」のはなぜか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ①  $\alpha$  のローカル者が異文化  $\beta$  を理解しようとするとき、常に対照枠  $\alpha$  に基づいた認知しかできず、かつその理解が正しいとされてしまうから。
- ②  $\alpha$  のローカル者が異文化  $\beta$  を理解しようとするとき、対照枠  $\beta$  を習得して理解したとしても、それはあくまで  $\alpha$  のローカル者としての理解であるため、偏ったものになるから。
- ③  $\alpha$  のローカル者が異文化  $\beta$  を理解しようとするとき、 $\beta$  のローカル者としてふるまうことを強制されてしまうので、その困難が予想されるから。
- ④  $\alpha$  のローカル者が異文化  $\beta$  を理解しようとするとき、対照枠  $\beta$  を習得して理解したとすると、それは  $\beta$  のローカル者として理解したことになり、異文化を理解したとは言い難くなってしまうから。
- ⑤  $\alpha$  のローカル者が異文化  $\beta$  を理解しようとするとき、対照枠  $\alpha$  と  $\beta$  との間にある大きな差異を、まず  $\beta$  のローカル者に確認する必要があるから。

## 二

次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

私の住んでいる家の近所に、初夏になってムシムシすると家財道具を燃やし始める飛松トリさんや物を売りつけに来る古畑ネギさんと夫、子沢山の堀田さんの三世帯が細長い一軒家に住んでいる。私は、古畑さんの夫、古畑大八郎という老人にお金を融通してもらえないかと言われる。

それは今年の始めの、ある寒い日であった。古畑老人はどてらの着流しで、ふところ手のまま、ぬっと私の庭に入ってきた。古畑老人は心臓がわるいという話で、そのせいか皮膚は土色をしている。頭には黒灰色の髪がまばらに生えている。冬景色のなかに立たせて、これほどびったりした人態は、他にあまり見当たらないように思う。荒れ果てた私の庭の眺めも、中心点を得て、にわかに関き立つ感じであった。やがてその中心点が、しずかに口を開いた。金をすこしばかり融通して欲しいと言うのである。

「今はありません」と私は率直にことわった。実際に余分の金は私になかった筈だから。

「今はなければ、何時<sup>いつ</sup>ありますか？」老人は低い含み声で、押しつけるように反問した。ブリキの貯金箱の差入口のようなれいの四角な眼が、まばたきもせず、じっと私の表情を凝視している。

その時どういう返事をしたのか、私はよく記憶していない。いい加減に話のつじつまを合わせて、私に現在は金がないことを納得させ、帰っても

らったのだらうと思う。いずれそのうちに、などと口を、迂<sup>すべ</sup>らせたかも知れない。そこらのやりとりは、どうもあやふやである。とにかく老人は、

肩をそびやかすようにして、その日は得るところなく帰って行った。なにか無形のもののは得たかは知れないが、実際の金は私から借り出せなかった。古畑大八郎とまとまった会話をしたのは、この日が始めてである。

一週間か十日か経<sup>た</sup>った。私が銭湯のなかで、向<sup>むか</sup>いの川島さんと顔を合わせた。すると川島さんがすぐさま私に言った。

「古畑さんに金を貸すんだそうですね」

「なぜです？」と私は反問した。

「あなたから借りるあてがあるから、それまでに少し融通して呉<sup>く</sup>れと、あの爺<sup>じい</sup>さんが言<sup>い</sup>ってききましたよ」

「それで、貸したんですか？」

「ええ。二百円ばかり」川島さんは湯気の間から、照れたような、また憫<sup>あは</sup>れむような笑い顔を、私の方にちらとむけた。そして言った。

「あのお爺さんと口をかわしたのは、これが始めてですよ。いつもツンとしててね」

「そう言えばそんな感じですね」

「二百円ほどいいと言<sup>い</sup>うんでしょう。貸さなきゃ悪いような気にな<sup>な</sup>ってね」

それと同じようなことが、ほかにもあった。裏の秋野さんがやってきて、私に同様のことを言った。

「君。古畑に金を貸すんだってね」

(中略)

そんな風にして、古畑老人があちこちから借り集めた金は、私の集計ではざっと七八百円にのぼった。どうして古畑にそんな金が必要なのか、私にはよく判らなかつた。するとある日、堀田のお内儀さんがやってきた。あの子沢山のお内儀である。もつとも亭主はいないのだから、お内儀さんというより、未亡人と言うべきだろう。その色の黒いくたびれた顔の未亡人は、縁側に腰をおろして、怨<sup>えん</sup>ずるような声で私に言った。

「ほんとに困るんでございますのよ。あたしは夜<sup>注2</sup>なべをやっておりますでしよう。ですからねえ」

「そうでしょうねえ」

どんな夜なべをやっているのか、それでどうして困るのか、わけも判らないまま、私はとりあえず相槌<sup>あいづち</sup>を打った。古畑のこととなにか関係があるらしい。そういう予感が私にあった。なんだかひどく身体がだるいような気分である。未亡人はその私の顔を、チラと横目で見た。

「あなたはわらつてらっしゃいますけれど、笑いごとではございませんのよ」未亡人は私の方に、ぐいと上半身を乗り出すようにした。

「早くどうかしていただかなくては、口が乾<sup>ひあが</sup>上つてしまいますわ。ご存じかも知れませんが、子供もたくさんおりますし——」

「ええ。しょっちゅうこの庭に、打<sup>うち</sup>連れて遊びにいらっしゃいますよ」

「そうでしょ」と未亡人は勢いこんだ声を出した。「あの子供たちが、夜中にオシッコをしたくなるでしょう。そうするとね、柱や壁に、頭や顔をぶつけて、コブだらけなんでございますのよ。多いのは七つもコブをつくっておりましてね。近所からコブ大臣という<sup>あだな</sup>綽名をつけられたりして——」

「どうしてそんなに、ぶつつかるのです?」

「あら。そりゃぶつかりますわ。あたしだって、時にはぶつかるんですもの」

「だって柱や壁のあり場所は、ちゃんときまっているんでしょ」と私はいぶかしく訊<sup>たず</sup>ねた。「それともお宅の柱は、動いたりするのですか?」

「動く柱なんてありますか」未亡人の顔に急に赤味がさして、すこし荒い声になった。

「電気ですよ。よくご存じのくせに」

「はあ。電気がどうかしたんですか?」

「切られたんですよ!」癩<sup>しやく</sup>にさわってたまらない表情で、未亡人は舌打ちをした。「だから夜はまっくらですよ。ほんとにほんとに、しょうがない」

電燈<sup>でんとう</sup>が止められたということが、やつとはつきり判った。そして未亡人の話によると、止められて一ヵ月近くになるそうである。そう言えばこの頃西の窓に、夜になつても灯影がささないと思った。しかしそのことが、私とどんな関係があるのか、まだ私にはよく判らなかつた。すると堀田未亡人は、睨<sup>にら</sup>むような、また流眄<sup>ながしめ</sup>みたいな眼付きになって、教えるような口調で言った。

「だってあなたは、古畑さんにお金を融通するって、そう約束なさったんですよ。あたしと飛松さんの分は、もうまとめて、古畑さんにお渡ししてあるんですよ」

電気代の滞納を三分して、二世帯分はすでに調達でき、あとは古畑家の分だけだと言うのだ。そして未亡人が催促すると、古畑大八郎の言い分は、私から金を融通受けしだい直ちにまとめて配電会社に支払うというのである。私は少しばかりは驚<sup>きもち</sup>く気持にもなった。あの寒い日、そんな約束

はしなかったように思うけれども、言葉のやりとりの中から、あるいは古畑老人は自分に都合のいい言葉を見付けて、いずれ借りられるものと解釈したのかも知れない。それが古畑老人の誤解であるとしても、未亡人の話では、事態はすでに遅すぎるようであった。私が意識しない間に、私が金を借り出される条件はすべてとのい、たくさんの人がその日を待ちくたびれている気配である。状況がこうであれば、私としてはどうしたらいいだろう。私は少しおどろき、また少しがっかりして、最後におそろおそろ訊ねて見た。

「それであなは、その催促にいらつしやった訳ですね」

「ええ。古畑さんが、貴方の様子を見てこいと、そうおっしゃいましたのでね、こうしてお伺いしたんでございますのよ」

それから未亡人が戻って行って、古畑大八郎にどんな報告をしたのか、よく判らないけれども、翌朝老人自らがやってきて、千三百円という大金を、私は簡単に借りられてしまったのである。ふだんの私ならば貸す筈はないのであるが、ずいぶん手のこんだ工作に眩惑されて、つい  
A  
と手渡してしまった。いつ戻して呉れるかということ、確める余裕すらなかった。その朝古畑老人は、私が寝ているうちに庭に入ってきて、あわてて起き直ろうとする私にむかって、単刀直入に口を切ったのである。

「千三百円ほど、貸していただきたい」

貸していただきたい、と言ったのか、貸していただく、と言ったのか、はつきりしなかった。後者だったかも知れない。低い含み声だったけれども、それは自信に満ち満ちた高圧的な口調であった。そして私からその金額を受取ると、ことさらムツとした不機嫌な表情をつくり、くるりと背を

むけて、さも忙しげに  
B  
と帰って行った。今考えるとその態度は、私に余計な質問を封じる魂胆からだったとも思われる。

その夜、私が西窓を細目にあけてのぞくと、細長い家の各部屋部屋に、黄色い電燈がとり、その下で集って食事している堀田家族や、寝そべって新聞を読んでいる古畑夫妻の姿などが望見された。ガラス障子を透かした灯の光が、古畑家の小庭の草花の色までも、ほんやりと浮き上らせていたのである。それを見たとき、うまくしてやられたという感じが、始めて私をほのぼのと包んできた。

(中略)

あれから一月ほど経って、古畑の方から何も連絡がないものだから、どうも放って置けないような気持ちになって、私は古畑家をおとずれた。ものごとを放って置けないような気持ちになることが、怠惰な私にも、時にはあるのである。古畑大八郎は部屋の中にいた。れの二枚だけすり切れていない畳の上に、大あぐらをかいて、皿から南京豆を  
C  
と食べていた。私の顔を見ても、皿を片付けようとせず、しきりに南京豆を口に運んでいる。ネギさんは縁側で、亭主に背をむけて、針仕事か何かをしている。同じ部屋にいるくせに、この夫とその妻の間には、通い合うものが微塵もないような、そんなヘンテコな印象が第一にきた。丁度 動物園の檻のなかで二匹の獣がそれぞれそっぽを向いて、勝手気ままにうずくまっ

ている、そんな感じにそっくりであった。私が庭に入っても、二人ともちらと私を見ただけで、あとは相変らず自分の作業に没頭している。

「古畑さん」と私は呼びかけた。もちろん大八郎に向ってである。

「せんだって御用立てしたお金のこと、今日はお伺いしたのですが――」

大八郎は顔を上げ、四角な眼をぐっと見開いて、私を見た。その手は相変らず規則正しく動いて、南京豆をつまみ上げている。豆を嚙むのに忙しいのか、返事すらない。

「——もうそろそろ、あれから、一カ月近くになりますし、私も近頃手もエ  
とが不如意になつてきたんですが——」

カラッポみたいな感じのする眼窩を、ひとと私に固定させて、大八郎は黙りこくって豆を食べている。向うが何ともしやべらないから、とぎれとぎれでも、私がしゃべらなくてはならない。力こぶが入るような入らないような、妙な気持になりながら、私はあやふやに言葉をつづけた。

「——そういう事情ですから、一応のきまりをここでつけていただきたいと、実はそう思ひまして……」

そっぽ向いて針仕事していたネギさんが、その時突然アッと大あくびをして、そそくさと立ち上り、便所の方へ消えて行った。大八郎は依然として豆を嚙みながら、四角な眼でじっと私を見据えている。とたんに何かが見る見る萎縮して、催促する気分がすっかりこわれてしまった。それでその日は、そのまま空しく帰ってきた。とぼとぼと帰りながら私は、その大八郎のとつた方策が、『睨み返し』という手であることに、卒然として思い当った。こういう撃退方法を、私はいつか寄席で聞いたことがある。しかしこのような方法は、落語の世界にあるだけだと思っていたが、現実  
にあり得るとは全く知らなかった。妙な可笑しさが私をさそつた。睨み返された自分自身をも含めて、隠微な笑いが私の下腹をしばらく痙攣させた。あの芸を見るのに、一回分百円ずつ出すとすれば、あと十二回は催促に行かねばなるまい。百円ぐらいの価値はあるだろう。そうすれば週に一回行

くとして、あと三カ月はかかる計算になる。それまでにひよっとすると、大八郎が根負けしてしまうかも知れないが、それならばまた、それでもよろしい。

その日から一週間日ごとに、私は規則正しく古畑家をおとずれ、規則正しく睨み返されて戻ってくるのである。大八郎は部屋にいることもあるし、庭に出ていることもあるし、縁側に腰をかけているときもあるが、私に相対して、口を利かないと言う点では、いつも同じである。失語症にかかりでもしたかのように、私の顔をまじまじと見詰めているだけだ。一応の芸ではあるが、芸がないと言え、そうも言えるかも知れない。ネギさんは相変らず、こまごましたものをたずさえて、私の家に売り込みにくる。私の要不要にかかわらず、物さえあれば一応は、私に持ちこんでくる習慣のようである。この間などは、どこから手に入れたか知らないが、上等皮製の犬の頸輪を売りつけに来たことがあった。飼犬もない私の家に売りつけて、どうしようと言うのだろう。彼女はよごれをふせぐために、いつも白い布片を着物の襟にかけている。髪を引詰めて結っているので、眼尻がすこし上に引きつれている。ネギさんの眼は、亭主のそれとことなつて、丸い眼である。その眼をしきりにパチパチさせて、ぼそぼそ言葉を並べ、是が非でも私に買わせようとする。大八郎と私の金のいきさつには、彼女は全然素知らぬふりをしている。ふりではなく、実際に関係がないのかも知れない。夫婦は車輪のようだと言うが、古畑夫妻はこわれ果てた荷車のように、双の車輪は別々の方角を向いて、別々の廻り方をしているようだ。げんに今も、草花を愛撫する老人のそばで、ネギさんはれの長火鉢の灰を、せっせとふるいにかけている。お互いに背をむけ合ったままであ

る。話し合う気配すら全然ない。しかしそこに、隔絶した平安とでも言ったようなものが、うすうすとただよっている。むし暑く D と濁った春の午後空の下で、それらは動かなければ、材木か石のように見えるだろう。そして向うから眺めれば、きつとこの私もそのように見えるのだろう。煙がまだ雑草灌木<sup>かんぼく</sup>の上を、淡く縞<sup>しま</sup>になってゆるゆると棚引<sup>たび</sup>いている。あの古畳も、すっかり燃え切るまでには、夕方までかかるかも知れない。

（梅崎春生「空の下」による）

注1 人態——人のありさま。

注2 夜なべ——夜間に仕事をする事。

※本文中には、現代では使用されていない表現が用いられているが、原文を尊重し、原文通りの記載とした。

8

傍線部ア「ブリキの貯金箱の差入口のようなれの四角な眼が、まばたきもせず、じつと私の表情を凝視している」とあるが、この表現の説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 金属質の得体のしれない細長い眼が私を凝視しており、思わず吸い込まれそうになるということ。
- ② ブリキの貯金箱のように変化がなく、人間とは思えない恐怖の対象が私を見つめているということ。
- ③ 四角という言葉に表現されるような厳格で澄み切った眼が私を見つめているということ。
- ④ 貯金箱の差入口のように細長く、蛇のような眼が私を凝視しており身動きができないということ。
- ⑤ ブリキの貯金箱の差入口に比喩される、硬質で、冷たく、揺るがない眼で私の表情を見つめているということ。

9

傍線部イ「私は少しばかりは驚く気持ちにもなった」とあるが、この時の私の心情の説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 約束をしなかった私に対して、周囲に借金をすることで、間接的に私を脅すという作戦を行った古畑大八郎に対して、金融関係者として敬意を抱いた心情。
- ② お金を貸すことは断ったものの、当日の記憶が曖昧で、自分が何を言ったのか定かではなかった私は、その私の曖昧さを見逃さず、そこに付け込んできた古畑大八郎の語りに心底感服した心情。
- ③ 古畑大八郎にお金を貸すことは断ったはずだが、他人から、古畑本人は、私からお金を借りることができれば、まとめて電気代を支払うと言ったと聞き、戦略の巧みさに意外性を感じた心情。
- ④ 私は、近所の細長い家に同居しているものを凡人として馬鹿にしていたが高度に戦略的な活動を行っていることを知り、自らの常識を覆され、深く傷ついた心情。
- ⑤ 古畑大八郎が何かを仕掛けてくるとは思ったが、周囲を巻き込んで借金をしようとする非常にエゴイステイックな行為に、驚きあきれた心情。

10

空欄

A

く

D

せとして最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- |   |   |      |   |      |
|---|---|------|---|------|
| ① | A | うかうか | B | どろり  |
|   | C | ポリポリ | D | トットツ |
| ② | A | どろり  | B | うかうか |
|   | C | トットツ | D | ポリポリ |
| ③ | A | ポリポリ | B | どろり  |
|   | C | うかうか | D | トットツ |
| ④ | A | トットツ | B | ポリポリ |
|   | C | どろり  | D | うかうか |
| ⑤ | A | うかうか | B | トットツ |
|   | C | ポリポリ | D | どろり  |

11 傍線部ウ「動物園の檻のなかで二匹の獣がそれぞれそっぽを向いて、勝手気ままにうずくまっている」とあるが、この描写の説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 夫婦二人は互いに交流のない世界におり、お互いに相手に関心を向けず、しかし同じ場所にいるということ。
- ② 動物園の檻の中の猛獣のように、イライラしてお互いを意識しながらも縄張りを守っているということ。
- ③ 動物園の檻の中のように、お互いが全く別のことを行っているようでありながら、言葉ではなく精神で繋がっているということ。
- ④ 夫婦二人は動物的な直感で私が借金を取りに来たことを感じており、協力して私を撃退しようと身構えたということ。
- ⑤ お互いの借金取りに対する対応策を見ようとして、どちらが先行するかを見極めようとしているということ。

12 傍線部エ「カラッポみたいな感じのする眼窩」とあるが、この表現の説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 井戸のように奥深く、芯に強い意志を秘めた様子。
- ② 返却できる金が全くなく無一文であることを訴える様子。
- ③ 自分の表情が映ってしまうように真っ黒な眼の様子。
- ④ 奥底に何もなく、どのような心情も読み取ることのできない様子。
- ⑤ あっけらかんとして子どものようにキラキラした様子。

13 傍線部オ「隠微な笑いが私の下腹をしばらく痙攣させた」とあるが、なぜ私はこのような反応をしたのか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 落語の「睨み返し」に発想を得た古畑大郎の手法の技巧のうまさ  
は認めざるを得ないものの、借金が返済されないことに腹を立て、  
憤っているから。
- ② 落語の話が自分の身にも降りかかってきたことを知り、これから  
何度でも落語の芸を見ることができると思えば、千三百円は惜しく  
ない投資だと考え、得した気分になったから。
- ③ 落語の「睨み返し」が現実にも存在したことの驚きと、睨み返され  
た自分も含めて落語の世界に入っているようで、その非日常の状況  
に少しの驚きと興味深さを感じたから。
- ④ 「睨み返し」をされたことで、私の、借金を返済してほしいという  
意志は砕け、何度通っても借金は返済されないのではないかと不安  
になって強いストレスを感じたから。
- ⑤ 「睨み返し」をされるとは思っていなかったので、私の現実世界の  
常識が揺らぎ、そのことによって寄席に行って笑いを得なければ回  
復できない虚無感を得たから。

傍線部カ」そして向うから眺めれば、きっとこの私もそのように見えるのだろう」とあるが、どういうことか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

① 夫婦は車輪のようだというけれど夫婦の間にも人知れぬ秘密やわだかまりがあるものである。そこからするならば他人である私と夫婦の間には非常に大きな隔たりがあるのは当然のことであり、その隔たりは冷たく暴力性をともなうものであり、触れてはいけないものだということ。

② 同じ空の下に住んでいる人間であるので、皆同じ感覚を持っていると考えがちであるが、世の中には自らの考えや常識からはかけ離れた世界がある。そう考えると、自らの見えているものには偏りがあり、他者の世界には不可解な部分が多く、同時に他者にとっての自らも不可解な部分が多くあるということ。

③ 隔絶した平安な世界が夫妻の間には存在していた。私は、夫妻のこのような様子に静寂をおぼえたのであるが、夫妻からすれば、私もまた、隔絶した平安を持っている存在である。他人を羨むだけではなく、それが自分にも備わっていることを今回の借金騒動で認識できたということ。

④ 空の下、人々の営みは一見、ばらばらに見えるが、そこには隔絶した平安と呼ぶべきものがある。それは子沢山の堀田さんの家族にもあり、そこから、心の平安というものは、金銭の有無に左右されるものではないことを私は学ぶことができた。この学びは私の今後の金銭感覚に大きな影響を与えたということ。

⑤ お互いにそっぽを向いているものの、夫婦とは車輪のようなものであり、お互いの現状を知り尽くすことで平安を構築している。はたから見ればそれは隔絶した平安であるかもしれないが、夫婦のことはその夫婦以外にはわからないのである。逆にいえば、夫婦にとって、私は淡い煙のような存在なのであるということ。

三

次のA～Dのそれぞれの設問に答えなさい。

A

15～18の各文の傍線部のカタカナを漢字に改めたとき、それと同

じ漢字を傍線部のカタカナに含むものを、それぞれ後の①～⑤の中から一つずつ選び、その番号をマークしなさい。

15

彼は私にはレイタンな態度をとる。

① 彼の勇気ある行動にカンタンした。

② 会社の経営がハタンする。

③ その手紙はタンセイな字で書かれていた。

④ 彼女の行動はダイタンになっていった。

⑤ 絵の具を使って色のノウタンをつける。

16

地球温暖化はセツジツな人類の課題だ。

① 誰にでもレイセツをわきまえた態度で接する。

② 外交問題で幾度もセツショウを重ねる。

③ 裁判長は、被告人に懇々とセツユした。

④ 受賞作品は、美しくアイセツな物語だった。

⑤ 質を重視するため、セツソクは避けよう。

17

ある一族のハンエイを描いた作品を読む。

① 彼はキョエイシンの塊のような人間だ。

② セイエイ部隊が敵を蹴散らしていく。

③ 自然のエイイによって作り出された景色を眺める。

④ 友達の音楽の趣味からエイキヨウを受ける。

⑤ 大好きなエイガを鑑賞する。

18

運命に抗ってもトロウに終わるかもしれない。

① バーゲンの商品に客がサットウする。

② 八〇〇kmの巡礼の道をトウハした。

③ トトウを組んで謀反を起こす。

④ 芸術は政治のようなトウハでは語れない。

⑤ 人格のトウヤが教育の目的の一つだ。

B

19の傍線部のカタカナを漢字に改めたとき、それと同じ漢字になるものを後の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

19

シンキ一転(気持ち)を新しく切り替えること)

① 心気

② 心幾

③ 心期

④ 心起

⑤ 心機

C 20 22 の各文の意味を持つ語句として最も適切なものを、それぞ

れ後の ① ⑤ の中から一つずつ選び、その番号をマークしなさい。

20 仕事をせずに遊び暮らすこと

① 天真爛漫(てんしんらんまん)

② 無為徒食(むいとしよく)

③ 傍若無人(ぼうじゃくぶじん)

④ 泰然自若(たいぜんじやく)

⑤ 天衣無縫(てんいむほう)

21 非常に短い時間、動きが非常に素早いさま

① 一挙一動(いつきよいちどう)

② 電光石火(でんこうせっか)

③ 一刻千金(いっこくせんきん)

④ 一触即発(いつしよくそくはつ)

⑤ 一心不乱(いつしんふらん)

22 勝敗、成否、生死などの分かれ目

① 瀬戸際

② 独壇場

③ 往生際

④ 金輪際

⑤ 修羅場

D 次の文章中の空欄 23 ・ 24 に当てはまるものとして最も適切なもの

を、それぞれ後の ① ⑤ の中から一つずつ選び、その番号をマークしなさい。

一八八二年、現在の山口県防府市に生まれた 23 は、一九〇四年、大学を退学後、自由律俳句の雑誌に投稿を始めた。熊本の報恩寺にて得度。晩年に自らの手でそれまでの句集をまとめた自選句集に 24 がある。

23

① 荻原井泉水

② 河東碧梧桐

③ 種田山頭火

④ 尾崎放哉

⑤ 高浜虚子

24

① 三千里

② 原泉

③ 大空

④ 草木塔

⑤ 鶏頭

(以上で問題は終わりです。解答票の解答番号 25 以降は使用しません。)